

▼特典小説『は一ちゃん&こりんちゃんに芸を仕込もう♪』

赤文字：は一ちゃん

青文字：こりんちゃん

太文字：あなた

休日、大きな犬娘2匹にわふわふと絡みつかれたあなたは、昼食の前に軽めの芸の練習をすることにした。朝ごはんの後に軽めの散歩に行くのが日課だが、今日は大雨でそれどころではない。そのせいで運動不足なのだろうと思ったからだ。

犬娘も種類によって、お勉強が得意な子と不得意な子がいる。その中でも、は一ちゃんは どうも物覚えが悪いような気がしていた。散歩のルートを間違え、こりんちゃんと自分の食器が見分けられないなど、細かいことかもしれないが、それが愛犬家であるあなたにとっては不安の種になる。

「お手」

こりんちゃんは涼しい顔でなんなくあなたの手に右手を乗せる。は一ちゃんは不安そうに右手をあげるが、手を乗せるのではなく、あなたの指先をぎゅっと強く掴んだ。

「乗せるだけでいいんだよ？」

「んん……」

こりんちゃんの指摘が面白くないのか、は一ちゃんは顔をしかめてあなたを凝視している。

「おかわり」

今度はは一ちゃんが先だが、何をすればいいのか分からないらしく、右手をあなたの手に乗せて『お手』をした。こりんちゃんはは一ちゃんをちらっと見て、左手をあなたの手に重ねる。

「……ちんちん」

こりんちゃんは上肢をあげて顔の前に手を寄せる。瞬間、あなたはは一ちゃんは勢いよく押し倒され、そのままズボンをずり下ろされた。止めるだけの力もなく、は一ちゃんはあなたの股間にむしゃぶりつく。

「ちょっとは一ちゃんっ、それちんちんじゃなくて——」

こりんちゃんはは一ちゃんのリードを引こうとしているらしいが、次第にあなたが漏らす甘い声に反応したのか「ダメだよ」と小さく漏らして、そのままは一ちゃんを押しつけるように、競って股間を舐め始めた。

ぐちゅぐちゅという水音。荒い息遣い。あなたの先端からは、昨日搾られた後に出しきれなかったせいでニオイのキツくなった古い精液が漏れている。

「ちんちん……ちんちん……」

は一ちゃんは呆けたように繰り返し、時折ペニスに牙を引っかけながら、舐め、しゃぶる。こりんちゃんはずっと優しく丁寧に、陰囊から裏筋を舐めあげる。射精欲が高まってしまっ

たが、あなたは飼い主として、2人を止めさせなくてはと思った。

「ダメだぞっ……っあっ……待て……！」

あなたの声で、ようやく2人とも動きが止まる。

顔を上げたは一ちゃんときりんちゃんは、さっきまでのお勉強モードから、完全に発情交尾モードへと表情が変わっていた。2人はその場に仰向けに寝転がる。こりんちゃんはちんちんのポーズで両脚を開いている。は一ちゃんは、両手で自らの穴を開いて、その奥をあなたに示している。

「ご主人……アタシ、交尾したくなっちゃった……」

「は一ちゃんより、わたしが先です……だって……教えていただいた芸、いっぱいできたでしょ？」

「おまんこしてくれたらアタシも覚えるもん……！」

「ご主人様……わたしにおちんちんください……！」

あなたは少しだけ考えて「**寝室に行きなさい**」と告げる。2人は立ち上がると、嬉しそうに奥の部屋へと駆けて行った。今日の昼ご飯は遅くなりそうだ。